－所蔵作品紹介－

川越　悟　KAWAGOE Satoru

Corps 8903

作品データはこちら

川越悟は北海道美幌町に生まれ、東京芸術大学で彫刻を学び、1983年に同大学院美術研究科彫刻専攻修了、同年より発表を始めている。

彼はまず、80年代半ばから後半にかけて、イメージ喚起力に富むインスタレーションで注目されるようになった。骨や植物のようなパーツ、ゆたかな装飾性、円環状の配置などが宗教的な儀式の場を思い起こさせたのである。しかし作者自身は当時の意図をこう語る。教わった彫刻の観念を一度「解体」し、空間の中に設定したいわば「仮想」の求心点に向かって「再構築」していくことにあった、と。この意図の実現を目指すシリーズは1987年から88年に区切りがつくが、そのなかから「有機的曲面と四角い面を併せ持つ形態」が「立ち上がって」きた。それがいっそう「立ち上がり、変化してきた」のが、ここにあげた〈corps〉シリーズである。

このシリーズでは、寄木（よせぎ）したクスノキから彫り出された形に、マットな白のアクリル絵具が塗られている。白は素材感を消すとともに、見る者の視線をはね返す。つまり質感やマッスという素材の属性を遠ざけ、ヴォリュームとフォルムという近代彫刻の造形原理を非物質的なレベルでつかみ直す可能性をひらくことになる（かつて「仮想」の求心点を求めたように）。それを武器に川越は、おそらくは無意識から「立ち上がって」きた人とも塔ともつかないすがたを、空間にたちあげるのだ。あくまで物質の生々しさを遠ざけつつ彫刻の思考に「corps（フランス語で肉体、実体の意）」を与えること。川越の彫刻が彫刻としての実在感とともにその場に清浄な空気をかもし出す秘密は、こんなところにあるのかもしれない。

*引用は川越悟「Corps～ニュートラルな形態」（『アクリラート』19号、1992年９月）より。

「北海道立旭川美術館コレクション選集1982-1997」（1998年３月発行）より